

2019年度GTセミナー 第52回保育環境セミナー 2020.1.20～1.22 前編

第152号 2020年1月27日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

第52回保育環境セミナー

2020年1月20日～22日に第52回保育環境セミナーが
東京都中央区のコンgresクエア日本橋にて開催しました。

全国から150名程の先生方が集まり、藤森代表の講演や実践発表、
園見学等3日間に渡り行いました。

1日目 2020年1月20日(月)

10:00～ 園見学
13:30～ 講演
15:00～ 休憩
15:15～ 見学園紹介
16:30～ GT活動報告
17:15～ 意見交換会

2日目 2020年1月21日(火)

9:00～ 実践園報告
9:30～ 見守る保育の5つのポイント
11:45～ ミマモリングソフト紹介
12:00～ 昼食
13:00～ ドイツ報告
14:00～ Q&A
16:00 終了

3日目 2020年1月22日(水)

10:00～ 園見学



第 52 回保育環境セミナー 基調講演『見守る保育の考え方』

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—はじめに—

皆さんこんにちは。最初の講座の話をします。話したように私たちの保育は「見守る保育」という言い方をしているが、「見守る」というと私が提唱しているということで、商標権を取ろうということで届けようとしたら、取れませんでしたと言われた。それは、誰でも使うものだからとダメと言われました。ということで、「見守る」は誰もが使う言葉です。その解釈やこの保育をしていますといっても、必ずしも私が考えている保育でなくても、していますといえはいくらでもあります。そして、その中で色々なことをこうじゃないか、ああじゃないかという人がいますが、皆さんには、そこから何を言いたいのか考えてもらいたいと思います。

—保育所保育指針に沿った保育—

保育指針や教育要領を根拠にしているが、最初にこういう保育をした時に平成元年に幼稚園教育要領が改訂されて、その次の年に指針が改訂されました。会場の中には、まだ生まれていなかった方もいると思います。この頃、保育指針は告示化されていませんでしたので、幼稚園教育要領と学習指導要領が改訂された次の年に指針が改訂されていました。平成元年に幼児教育の基本が謳われました。その一つが、幼児教育は環境を通して行うものと謳われました。私たちは環境を通すことなので、直接保育者が「ああしない」ではなくて、どんな環境を作るか。環境を通して、発達を促していくことが初めてきちんと謳われました。しかもその中に、保育指針の方に書かれたのが、環境を通して、養護と教育を一体的に行うと書かれました。養護と教育という二つの要素で環境を作っていく。それを通して、子どもの発達を促していくと書かれました。幼稚園教育要領では続けて、「教師は、子どもと共により良い教育環境を創造する」と書かれました。次の年の指針には、養護と教育を通して、環境を通して行うとされました。その中で養護は子どもたちの健康や安全の保障。もう一つは情緒の安定。一つ目の健康や安全は生命の保持、命を大事にすることが養護の一つ。二つ目が情緒の安定です。情緒はケアという訳しでもあるが、日本語のイメージから世話をするとか、ミルクをあげるとかが養護。教育は何か教えることになってしまうが、そうではなくて、生命の保持と情緒の安定がされていかないと教育はされていかないので、養護はそういう意味です。教育もこの誤解があって、教える育と書くので、乳幼児を教える育でないと思いがちだがそうではなくて、環境を通して発達させていくことが教育です。それは発達の特性にあります。当然皆さんは分かると思いますが、赤ちゃんが寝返りを始め、ハイハイをして、伝い歩きをしていくように発達していきます。その時に寝返りやハイハイを教えるわけではありません。右手を出して、左手を出してと教えるわけではありません。寝返りをする前の赤ちゃんは自分から移動することはできません。寝かされたら寝たままで。自分から移動したいという意欲を持って、自分で移動する。最初的手段が寝返り、そこには移動したいと思う本能的なものもありますが、その環境として向こうに欲しいものがあるとか、行きたい先生がいるとか、寝返りを教えるのではなくて、寝返りをしたくなる環境を用意しておく。子どもはそれを自分から働きかけ、自分から取りに行こうとすることなので、指針に書かれたのは、発達は自ら環境に働きかけて、自主的に動きことにより、環境との相互作用として発達するということが発達の特性として書かれました。発達の条件は、環境に自分から働きかけること、主体的に関わることが心情、意欲、態度という言葉に表されるが、そういうことが謳われています。それまでは子どもに何か教えないといけないとか、小さな赤ちゃんは世話をしないといけないとか、保育者がど

するかが思われていたが、平成元年に環境を作ること、子どもが自発的に動くことで発達するということが謳われのは30年以上前の話です。その通りにしよう、指針は一つの法律に近いものだから、子どもが自ら働きかける環境だったら、何かを棚にしまって、積み木をしましょうでは発達はしていきません。描きたいと思った時に、描ける環境を用意する、ということでおもちゃや玩具を用意して、子どもは自分から行けるように置いておく。それが形としてゾーン、最初はコーナーと思っていたが、用意しておくのは、私たちが提案しているわけではなく、指針にそう書かれている。今のような環境を作っているが30年経って、見学者にきた人たちが「こういう保育を初めて見ました」と言われるが、「もう30年前ですよ」と言うしかない。未だに先生が今日はこうしようとかが中心になっている。それ自体がいけないわけではないですが、本質ではない。子どもが自分から歌いたい、楽器をしたいことが出来るような環境を用意することで、平成元年にそういうことが書かれました。10年ごとに指針が見直されているが途中から告示化され、幼稚園教育要領と同時に改定されるようになりましたが、基本的に10年ごとに見直され、もう一つ大きなことが、環境を通しての時だが、子どもの発達を助長するには、どんな発達かを整理して、どんな部分の発達を子どもに促したらいいかを分かりやすくするために領域があるんです。発達を見るための切り口として領域が定められました。最初領域を作られたときは、子どもたちに何かをしないといけない、教えないといけない。教える内容が書かれていました。ですから、小学校の教える教科の代わりに作られましたので、図工の代わりに絵画制作があり、音楽の代わりに音楽リズムを作りましたし、そこではそれを教えないといけないということで、全国一斉に音楽リズムでは鼓笛隊が出来て、鼓笛隊を通して学ばせよう。絵画制作ではさせないといけないということで、運動会の後には運動会の絵を描き、母の日の後には、お母さんの絵を描かせることが起きました。しかし、私たちは小学校の教育とは異なり、小学校へ行って絵を描けるようになるためには、早くやらせることではなくて、それを楽しむことをしないといけない。興味を持ったり、楽しませるためにそれを通してどの部分が発達をさせようかと、子どもたちに表現力をつけるということで、音楽リズムと絵画制作をやめて、表現領域を作りました。その時本来は、表現という発達をさせるということなので、鼓笛などを見直したり、一斉に絵を描くのを見直さないといけないのに、いまだに続いてしまっています。幼稚園教育要領でも書かれていないはずですが。私たちが提案している保育は決して、新しいものではないし、指針要領に書かれている通りやったら、こうなるだろうということです。それに對して、どうの、こういうことではなくて、そういう保育に変わろうとしています。幼稚園の世界では、これからの施設の在り方という指針が10年ごとに見直されるが、5園程取り上げられ最初はお茶代付属だが、様々なコーナーを作って、子どもが自発的に取り組むような環境を作りなさいと書かれています。そう言う風にして、幼稚園の基本となるお茶代付属でさえ、コーナーを作り始め、その中で子どもたちは取り組むという環境がスタンダード化し始めました。私たちは早めから取り組んでいたことが一つです。

—幼児教育の特徴—

幼児教育に特徴があります。それは、発達の特性を理解しないとけない。その特性の一つには個人差がある。何歳で何が出来るということは目安であって、必ずしもそうならない。しかし、その個人差は、いつどのように出来るかであって、発達にはどの子にも順序があります。寝返りをして、ハイハイをし、つかまり立ちをするのは、どの子においても個人差があって、その辿る経過はどの子も同じです。そこは、私たちがきちんと押さえないとけないことです。2歳でおむつが取れます、その前に生活の自立、汚れたことを気持ち悪いと感じないとけないですし、随意筋と言って、自分で筋肉を収縮して、トイレ行くまでおしっこを我慢する筋肉をつけないと、排泄の自立に行きません。2歳だからできるわけではありません。そして、連続して起きることです。環境を通して行うことも特性の一つ

ですけど、そういうことがあります。学校の学習指導要領と大きく違うところは、小学校の指導要領の項目は、教科ごとに、学年ごとの到達目標が書かれています。例えば、1年生及び2年生と書かれているが、漢字は1年生は80字、書けるようにしなさいと数が決められています。算数では、足し算・引き算を出来るようにすると、学年ごとに決められています。小学校の授業は教科ごとに決められているので、時間割があり、学年ごとに到達目標が決められているので、学年ごとに授業するしかありません。しかし、幼児教育では決められているのは、子どもの発達を卒園するまでに、ある発達まで育ててくださいとしか書かれていません。それは個人によってスピードが違うし、卒園するまでにということが決められている。それでは目安が分からないので、指針の中には概ね8つに分かれていて、この位の年齢では、これくらいが出来るようにということが目安であるが、現場の保育者は小学校のように、到達目標として捉えてしまった。年齢ごとに学年を作り、クラスを作り、概ねの目標をしてしまった。2歳で排泄の自立といったら、2歳でおむつを取らせようということが起きた。そうすることで帰って、発達が遂げていない子が増えてしまった。今回の指針の改定では発達過程がすべて削除されました。その代りに入ったものが、卒園するまでにこういう姿にして下さいという10個だけが取り上げられているのが「10の姿」。特別にさせることなく、卒園前にこんなことをして下さいと書かれているのは、本来領域ですが、広すぎて小学校の先生が読み切れないので、領域の中から特別に10個書かれたものが「10の姿」です。当然、0歳からその方向に向けて発達させることで、年長でやることでもありません。そして、そうやって個人でやった時に何歳で何をしましょうではなくて、どんな発達かを中心にしていかなければなら、小学校のように生年月日でクラスを作るのはおかしくなる。でも、私たちは決められていないので、一人ひとりの発達を見ていこう、生年月日にこだわらないで、生年月日はまたがる可能性があるので、異年齢児保育と言いう言い方をします。異年齢児保育と聞くと、異年齢で遊ばせようと思ひ浮かべるが、そうではなくて、一人ずつの発達を順序立てて、発達させようということです。もうすぐ豆まきがあり、例えば升を作る。折り紙を使って升を作るとか、はさみを使って升を作ると計画をします。それは升を作ることを通して、何かを発達させたい。はさみの発達をさせたいのかで、升を作る訳です

—異年齢保育の提案—

そうすると、その子が一体ハサミがどれくらい切れるか？直線が切れて途中が切れるのか、曲線が切れるのかで作るものを変えましょうというのが、異年齢児保育の提案で、他の年齢とどうかという話ではない。一人ひとりの子どもがどうなのかという話。例えば345歳を一緒にして直線切り、曲線切りで自分の発達に合ったものを選ぶんですね。折り紙だったら、3回折、5回折、7回折で作れるものを子どもが選ぶと、3歳のほとんどが簡単なものを選び、5歳は難しいを選びますが4歳はバラバラです。それを今までは、年長は難しいことをやっていたのが、所謂年齢別です。異年齢は必ずしも一緒に遊ばせるとか、触れ合わせる意味ではありません。一人ひとりの発達を遂げさせようという意味で、生年月日にこだわらない。例えば0歳で散歩に行きましようと言っても、まだ歩けない子。走り回れる子がいるので、一緒に行く意味がありません。何のために散歩へ行くのか、歩き始めると歩きたい喜びを味わせたいと思ったら、歩き始めた子で行く。0で行く、1で行く意味はありません。もしかしたら、障害の子で歩き始めた3歳の子がいたら一緒に行くということの異年齢の考え方です。忠実に指針のようにやったら、こうなったということで特別な保育ではないですね。もう一つは発達が近い同士でやったら、生年月日が合わないということだが、発達が違う同士をする意味もあり、その意味は、人類は長い間進化をしてきた。その一つに真似をする、人間の特別な行為があり、進化をしてきました。真似をするためには、少し上の出来る子を見ないといけない。ですから、0歳は食べさせられている子は、手づかみ食べをしている子を見たり、フォークを使っている子は、フォークを上手にを使って

食べている子を見せるとか、一緒に触れているだけではなくて、上を見る環境も異年齢です。それを0だけの環境にしたら、見る相手がいません。見て真似るため、見て自分もやろうとするのは、異年齢の中の効果的なこと。もう一つ、下に教えることで自分の能力を定着させていくということで、1歳は0歳にいろいろ教えることで自分の能力を定着させていると言われています。同じ異年齢といっても、色々な意味があり、昔は異年齢だと、面倒を見る、見られるが言われていたが、それだけでなく、見て真似たり競争したりがある。見学者にも言ったが、異年齢児を保護者の中でも反対するのは、年長が345と一緒にすると幼くなると言われる。年長は年長らしくあって欲しいと質問をされる。中国の方に話したのは、「あなたたちは兄弟がいないでしょ？」今の中国の保護者は、一人っ子なので兄弟がいません。なので、兄弟の体験がありません。兄弟の中で長男、長女は幼くなるかですね。異年齢の方が年長は年長らしくなる。兄弟は当然異年齢で、赤ちゃんぽくなるか？ということですが、どんどんしっかりする。教えたり、プライドもある。私の園も見て頂くと分かると思うが、年長さんもプライドがあり、自分で自分のことをする。異年齢は決して一つだけの考えた方だけでやるのではない。私の園でも、年長だけで保育をする時間がある。それは小学校へ行く移行の保育ですが、職員には年長に移行の保育をしないように、来年小学校に入る子に移行の保育をする。世界では、ヨーロッパは特にそういう国は多くありません。日本は6歳になると小学校に入りますが、ドイツでは6歳になると小学校へ行く資格が得られる。いつ行くかは親が決め、インテリの親程1年遅らせます。小学校は異年齢です。勉強も大変で、もう少し遊ばせようと思わせるようで、早く小学校にならせても落第しても仕方ないので、来年小学校へ行く子たちを集めて準備をしている。生年月日で子どもを集める意味はあまりない。異年齢で、ゾーン・コーナーを作ることは指針通りで、私たちが提案している保育ではありません。私たちが提案するのはもう一つ上を考えています。

—子ども集団が持つ意味とは—

1つは子ども同士の関係をどう作るか。今までの欧米の保育は保育者が子どもにどうするか。どうか関わったらいかがが多いんです。例えば、ケンカをしている。保育者はどこまで見ていたらいいか？どこから手を出すかだが、私はその前に他の子がどうするかを入れたい。先生がどうするかの前に、そういう子を育てないといけない。私たち人類は助け合ってきた生き物だからです。一人で何かをしてきた生き物ではありません。助け合う、協力する。子ども同士の関係を兄弟、地域の中で作られたものが今は、少子社会になると、家ではそういう力は育ちません。保育園でしかできません。「見守る保育」をするとどこで止めたらいいか、どこで注意したらいいか？を聞かれるが、怪我をするなら早く止めないといけないと思っています。実際はそういうことを言っているわけではなくて、昨日、卒園した子たちの親が集まって、小学校で子ども同士がけんかをするします。他の園の子はすぐ先生たちを呼びに行くが、うちの卒園児は、「何で大人を呼ばないといけないの？自分たちで何で解決しないの？」と言っているらしいです。先生が来ても解決するわけではないというように、うちで保育を受けた子たちはそう育っている。当然、大人の手が必要な時は呼びますが、取っ組み合いだったら大人を呼ばないといけないが、ちゃんと言い合っているのなら話せばいいし、他の子が手助けすればいい。もう一つの例が、見学者を案内している時に3階の給食の時に、うちは一斉に「頂きます」をします。当番の子が「頂きます」をしますが、ある時、当番の子が3人いて、席が明らかに1席しか開いていませんでした。私が担任に「1席しかないよ」といったら、分かりました机を出しますと言った。女の子が空いているところに行ったが、座らないで立ったままだった。何でか分からなかったのだが、そこは皆男の子が座っていて、一人女の自分が入るのをためらっていた。年長の女の子がそれに気づいて、「私たちがずれるから、こっち座っていいよ」と言って、子どもたちはすぐわかって、椅子を持って行って、そこに座りました。男の子は当然開い

ているところに行きましたが、椅子が無くて、そこに制作ゾーンから椅子を持って来てそこに座りました。3人目は女の子で、どこも開いていなくて、もう一人の年長さんが、隣の制作ゾーンから椅子を持って席を作ったが、その子がなかなか座りませんでした。何故かという、制作ゾーンの椅子は背中があるのだが、その椅子には背もたれがないことに年長が気づいて、皆に向かって、「皆、立ってよ！この子、一番小さいんだから、この子にまず座りたい椅子を選ばせよう！」と、どの椅子がいい？と聞いたら、その子は配慮が分かったのか、この椅子でもいいということになったときに、見学者が、「私たちだったら、机・椅子がないと気付いたら、すぐに用意してしまいます。そして、こういうことは起きませんね」といった。子どもが「座る場所がないから出して！」といったら、出せばいいが、そうでなかったら、お互いが配慮し合って座る。子どもたちが工夫して、助ける時間を作りましょう、ということが将来、世の中に出て意味のあることだと思っています。

—子ども同士の研究—

子ども同士の関係をやるのは、今はなかなか難しいのは、子ども同士の意味の研究がありません。今の心理学の研究では、一人の子を追跡して研究するもので、子ども同士の研究はこれだということ、誰がどういう影響を与えるか分からないからです。子ども同士のことを言うと、エビデンスがないと言われます。子ども同士の研究はあまりないんです。子ども同士がどう関わるかを見ています。子ども同士が助け合ったり、協力する姿を見ています。それが人は協力して、進化してきた中で、トマセロという人が『なぜ人が協力するか』の中で、赤ちゃんは9ヶ月革命と言って、「人は意図を持った存在として認識する」と発表した。赤ちゃんから母子との2項関係だけではなく、もっと複数と触れ合わせないといけない。他の人は違うことを考えているということを知ること、自分の感情を見出すだけでなく、我慢する力や、相手に共感するようになるということがわかってきています。それが将来、協力する力になるんだという研究です。愛着関係と言って、一人の人とべったりいなさい、愛着形成が出来て、将来問題が起きないと言われていたが、今の研究ではそれが否定され始めています。赤ちゃんは9ヶ月くらいにすると、他者を認識し始め、不安を感じるようになります。その時に誰か守ってくれる人が居るのだと感じられるようになり、離れていくために愛着が必要なんです。愛着関係が出来ていないと離れていけないんです。それが9ヶ月位までに作るのが授乳期。母乳をあげている時期は母親があげて、9か月になると、最近の研究では、愛着形成は必ずしも母親じゃないものに求める可能性がある。その一つが他の子どもだと言われています。例えば、今月号の私保連の通信にある原稿が載っていました。それは、ある赤ちゃんが保育者にべったりでした。その先生がいなくなり追って泣いていた。その園の主任が行って、赤ちゃんを抱いて慰めたが泣きまわっていました。そこで、実習生がいたのでそこに行ったが抱っこしても泣き止みませんでした。泣き止まない赤ちゃんを下ろしたら、他の子の所に行き、顔を他の子に付けて泣き止んだそうです。他の子でも慰める力がある。うちの園でもこの前聴きました。他の子によって不安を解消しているということで、現在の研究では、どんないい母親でも、子ども集団の代わりは出来ない。仲間集団は時として、母親の代わりも出来る。勿論、母親の愛着形成が出来るのがベストです。しかし、母親がそういう存在でなければ、保育者の様な養育者でもいい。その時に他の先生や他の子に行きます。今の研究では、色々な人でも無理な赤ちゃんがいるが、その時は物に愛着を求めると言われ、ライナスの毛布やおもちゃを持ち歩くと言われ、若者が不安な時にスマホに求めることがある。どこからか、赤ちゃんの方が選んでいるが、大人が「あなたの愛着形成は私です」と言っているが、気が合ないと不幸。赤ちゃんは生きるために人を選んでいる。初めて保育者になって、慕ってくるとうっとりしてしまう。昔、自分の園で、ある先生が赤ちゃんを抱っこしてて、私に渡すと当然その赤ちゃんは泣くが、その先生は私なら泣かせまいとするが、「これ何？」と思ったことがあった。どうしても慕われると、うっとりする

ことが多いが、子どものことを思うなら、色々な先生の元に行ける子にした方がいい。以前、教員をしていた頃、毎日、日刊を出していたが、うちのクラスの子は毎朝、職員室に「藤森先生、おはようございます」と挨拶をしに来てくれていたが、私に挨拶をするだけでなく、他の先生たちにも挨拶をすると、うちのクラスの子が他の先生にもかわいがってもらえるのも嬉しかった。離すから愛着が出来る。いつも自分の所に来るから愛着が出来ているわけではない。自分だけが人気がある訳ではありませんから、子ども同士には意味があることが一つ。

—自由遊びの重要性—

もう一つ最近の研究で言われているのが自由遊び。ルールのない遊びのことを言うが、アメリカで研究されたのがテキサス州で射殺事件がありました。大学の上から43人を射殺して、テキサス州のブラウン博士が研究をはじめ、死刑の宣告を受けている23人の成育歴、特に無差別殺人を調べたら共通点が2つあった。1つは家族から虐待を受けていたこと、もう一つは、子どもの頃に遊んだ経験がない。その後、ブラウン博士が人生を掛けてアメリカ全土の犯罪者を43年に渡り6000人の成育歴を調べた結果、子どもの頃にルールのない自由遊びをしたことがないという共通点がわかった。今は多くの心理学者が思っているが、ルールのない自由遊びは相手の気持ちとあっていないとできないと言われ、色々な国に自由遊び協会が出来てきた。アメリカからどんどん自由遊びの時間がなくなってきている。いい大学に入りたいとか、ルールのある教室、例えば音楽教室や体躯教室にしても、大人が決めたところで言って、子どもの発想だけでやっているところが少なく、最近射殺事件が増えて来ている。こういうことがあります。

—モンテと「見守る保育」の違いとは—

まず一つ、中国やシンガポール、この前は韓国で講演を頼まれました。中国では講演をすると保護者からの質問でモンテに似ている、どこが違うかを聞かれる。中国ではモンテが流行っています。日本のモンテは時代的に変化しているが、中国ではモンテ通りやって、流行っています。私の考えと似ていて、どこが違うかを聞かれます。3つ違うところがあります。まず子ども観、子どもは自発的にやるべきというのは同じです。それから教具は子どもの自分の発達に合ったものを選ぶので、基本は異年齢です。それから鍵を掛けた棚に教具を入れておいたが、モンテがある時カギを掛け忘れて帰ったら、子どもは自分で取って、自分でやるとこんなにイキイキするのだと、モンテ教材は鍵のない所においていて、コーナーみたいなところで、自分で取って選んでいるのは似ているが、違う所のまず一つが子ども集団の考え方です。モンテがいけないのではなくて、時代性で少子化ではありませんでした。家に帰ると兄弟がいっぱいいました。それで子ども同士が十分できていたが、一人ひとりとは十分でないと教具を考えたんです。棚に置いてある教具は基本的に一人ひとり、やるものです。子ども同士が関わりません。それによって、子どもの発達をちゃんとさせようとした。中国はそれ通りなので、うちの職員でモンテの園に預けている職員がいるが、畳み方から置き方、広げ方もちゃんとあるようで、うちの職員が保育参観に行ったらしいが、ある子がかどが折れ、曲がっていることに気づかないで、他の子が気づいて、手伝おうとしたら、先生が「手伝わないで！」と言っていたそうです。散歩に行くときも、手を繋がないそうです。協力することが無くて一人ひとりです。色々なコーナーの中にはごっこ、ままごとのようなものはないですし、ブロック遊びもありません。全部一人ひとりです。これを見ると明らかに懂れるんです。モンテの子はシーンとやっているのでも懂れるんです。今の時代だったら危ないですよ。中国は一人っ子政策で、家で黙々とやっている子が、園でも黙々とやっていたら、世の中に出たらドロップアウトしてしまう。もう一つは先生が全部ルールを決めています。自分たちで創意工夫しません。手順通り遊ぶことに意味があるのですから、将来予測不可能な時代には対応が出来なくなる。それから社会的スキルが身に着かない、言語が増えていかな

い。もう一つは問題解決能力。変化の時代に対応する力が付かないと言われています。もう一つ大きな違いは白紙論です。赤ちゃんは白紙で生まれる。大人が子どもを誘導していかないといけない。昔は白紙論で、大人が指導していたが、日本は今協力を、まもごとを入れるように変化などしているが、モンテを参考にした別の保育だと思うが、モンテから学ぶこともあるし、いいことも多い。だからと言って、時代性もあるのでそのまま持って来ても時代性も変わり、自由遊びが大事です。そうすることが一つの次の課題として提案していくことです。

—遊びの質とは—

遊びの大切さをもう一度見直さないといけない。「遊びは大切」だけで、遊びの質は、私たちが考えないといけないです。遊びの中から色々なことを学んでいく遊び。楽しいからではなくて、環境を通してなので、環境を考えないといけないのは環境と同時に相互作用、いわゆる、環境を使っていくであろう経験を色々な経験をさせていかないといけない。それが今いい玩具と言われるのは、子どもの発達に合わせられる、子どもの遊びが進むに従って、合わせられるような玩具。例えば、絵本がその一つ。子どもの読み手によって与えるものが違ってきます。最初は絵だけを楽しみ、だんだんストーリーを楽しみ、読み手によって変わって来ます。ブロックも積み上げるのから、ビルを作ろう、街を作ろうとなっていく。制作も同じで、クレヨンでも丸から顔になったり、色々な物を書き始めたり、発達によってだんだん上がっていくものを常設として置いておくことが大切だと思います。季節や環境によって持つことがあります。31（アイスクリーム屋）が出来たら、31 ごっこをしたいとかがあります。それが出来るような環境を見つけて、作っていかなければならない場所もあります。これが流行りのプロジェクト保育です。子どもが興味を持ったもの、知りたがったものを膨らましてあげること。これがプロジェクト保育です。言葉を知らなくても、子どもがこれに興味を持っている、例えばブロックを遊んでいて、電車が好きな子がいました。ブロックを繋げて電車のホームを作って遊んでいました。先生が何気なく、ブロックに山手線の駅名を貼ったら、線路を丸くつなぎ、山手線、中央線を作って街づくりを始めた。去年はお城が好きな子がいて、ブロックでお城を作り始めたので、お城の写真を置いておいたら、他の子が城の周りに石垣や城下町を作ったり、女の子たちは城下町の中に動物園を作ったり、コンビニを作ったり発展させた。どこかで飽きるかもしれませんが、飽きたらやめたらいい。子どもが興味を持ったものを発展させ、子ども同士を繋げていくのが保育者の役割です。そこで遊ぶかどうかは見向きもしなかったら片付ける。それが当たった保育者は、意図が当たったと嬉しいものです。ワクワクする毎日を送らないといけないと思います。義務するような仕事ではありません。こんなことに興味あるかもしれないと用意する。私たちや大学の先生が単語としてプロジェクト保育と聞いたがるが、子どもが興味関心あるものを繋ぎ、発展させていく環境を用意すること。話し合っ、週案を作る時にあれがいいね、これがいいねということ。そうすると、皆で工夫する。それぞれの年齢ごとに課題がります。1歳になると歩き始めます。そうすると当然、歩く喜びがあります。最初の頃、不思議でした。あっちに早くいきたいといって、ハイハイを始めます。もっと早くいきたいと思ったとします。這うが上手になります。楽に物が取れるようになりますが、それなのにわざわざ大変な立つことをする。モノを取りに行きたいなら、這っていけばいいのに、それなのに立ち上がろうとします、不思議だと思いませんか。赤ちゃんは楽だからやっているというのは大人の考えで、そんなことない。その先を観て発達させていくものです。大人がすぐに抱っこをすると、楽をしたがっていると思うかもしれませんが。子どもは、大人の考えだけではありません。よく抱っこという子がいるが、着いたらやたらと走り回り、疲れたならじっとしてると思うけど、走り回りたいから、体力を温存しているのかもしれない。大人のように、楽をしたいでは進化してこない。赤ちゃんが歩き始めたら、当然走りたくなる。それを走っちゃダメというのはおかしい。ダメなのは、走ってはいけない場所で走ることなので、それは私

たちの責任で、環境を通して行う環境がないということです。子どもに怒ることではないです。走り始めたら、走れる環境を作ることです。

—探索活動の重要性—

それから1歳になると好奇心が強くなり、将来の遊びの豊かさを作るために必要と言われ、その一つが探索活動とされています。やたら、きょろきょろします。将来、必要なことなのに、よそ見しないで食べなさいは大人の考えです。静かにさせたいなら、見させないことですよ。抱っこ紐で頭に布を掛けたら真っ暗なので静かになるが、落ち着くわけではなくて、刺激がなくなるということで脳が動かなくなる。きょろきょろしている子ほど、上にいった時に落ち着く。止めたら、どこかで見たくなる。それを安心していけるようにするということで、危ないところはダメだとしたら、どこか出ていく可能性がある。子どもがあっちに行ったらあっちにいる先生が見る、というのが私が考えているチーム保育という考え方です。場所を担当する。今日01を見て頂いたが、そういう時間帯になると均等に先生が配置します。子どもがどこへ行っても、布団を敷いている先生がいたら邪魔してキヤーキヤーしている子がいます。表立ってはいいいとはいえないですが、自分の子どもの頃を思うと、邪魔するのは面白い。それを「全く～」といいながら、それを出来るのは、その先生が見ているから。担当している子だけを見ていたらそれは許されない。探索活動が多い子ほど、将来の遊びが豊かになる研究と、探索活動をする移動距離と、怪我をする率が反比例するといわれている。移動距離が多い子ほど、怪我がする率が低いといわれています。探索活動は、発達の一つでは無く、将来のための下見だといわれ、どこでどう怪我をするか、移動距離が大きいほど危機回避が優れているといわれています。その時期に十分させてあげること、行ってもいい場所を作ることです。怪我をしたと報告に来るとします。私は管理職の性で、とっさにその子を心配と、その子の親はどういう親と聞いてしまいます。そうすると、よく言う子の親程、怪我をします。親が探索活動を止めてしまう子ほど怪我をしています。自由に行っている子は、怪我をあまりしていないので理由がある。その時期、時期にやること。探索する時期、ものを触る時期、それぞれの時期は将来のための発達に必要な行為で、安心してできるように環境を用意する。環境は0からつくるのは大変で、子どもをよく見て、何をしがっているのか。それを安全にできるような環境を作る。机の上に乗って飛び降りる。「ダメでしょ！」じゃなくて、高いところから飛びたいと思って、台を作って、そこから飛べるようにするとか、悪さをしているように見える時には、発達に何か必要なことをしているのだと考える。小さいうちは悪戯しているように見えるが、大きい子たちは、自分たちで計画してできるような素材を用意すること。何を置くよりも、子どもをよく見て、何をしがっているのか。それが当たらなければ、考え直せばいいだけの話です。もし遊ばなかったらどうしようではなく、時期が早かったねと思えばいい、絵本も全然読まないのは、読みたい本がないからかもしれません。読みたいと思うような本を用意するとか、読みたくなるような導入をすること。子どもに注意することの原因は先生にあります。それを出来れば、話し合ったり、色々な見方をする。私は絵を描くのが得意だが、指導するのが難しい。私の息子は絵が苦手な人で、ある時、妻から「お父さんに教わりなさい」と言われ、幼稚園の頃だったが息子が大泣きしました。「お父さんに聞くと、好きな絵を書けとしか言わない！僕は、車が描きたいんだ。お父さんは、どう書いてもいいよと言う」と言って大泣きしました。絵が描けないのは、絵がどんなものかを知っちゃっているから。車の形を知っているから描けない。私はそうではなくて、思ったようにでいいよ、と言ってしまいが、子どもはそうではない。それを学ぶのが意外と友達同士で、他の子の描いているのを真似ている。昔はそれはダメと言われ、女の子たちが集まると、太陽を描いて、お花を描いていたが、今はこれが効果があるのではないか、パターンがあることがあるといわれ、真似しちゃダメと怒るのおかしくて、真似をすることが人の特徴です。

改めて考えると、保育でイライラしたり、ストレスを溜める必要はない。2歳で排泄の自立という議論をよく、保護者が話しているが、まだできていなければ、3でもいいと思ってしまえば、どうってことないが、全員が同じように同意していないとだめです。子どもを信じること、同僚を信じると、びくびくしたり、焦ることもプレッシャーもないはずで、日々を楽しめば何の問題もないと思います。子どもは自ら学ぼうとするし、発達していくものなので、それをちゃんとしていけばいいし、何もないものを見つけさせようということではないので、そういう見方で保育を楽しんでもらえたらと思います。その中で、子どもたちは発達を遂げて、学校に行けるようになると思います。

「見守る」は、手を出すとか、手を出さないということではないですし、必要があれば手を出して構いませんし注意しても構いません。踏切があって、それを渡ろうとしたら、怒鳴らないといけないし、制止語はダメといわれるが、そういう時は制止語を使わないといけませんから、そんなのを見守ってはいけませんし、止めないといけませんので、子どもを見つめ直すと、子どもが可愛く見えてくると思います。最初基本だけで、言葉で誤解されているところもありますので、その辺りの話をしました。この辺りの実践をこの後、聴いてもらえたらと思います。ありがとうございました。

(文責/奥山卓矢)